

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 匹田 剛 印

学位申請者 光井 明日香

論文名 現代ロシア語における性に関する一致をめぐって

【審査結果】

光井明日香氏から提出された博士学位請求論文「現代ロシア語における性に関する一致をめぐって」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると全員一致で判断した。

最終試験は2024年1月13日13:30～16:30、オンラインによる公開で実施された。まず最初に光井氏より提出論文の概要説明があり、その後各審査委員から光井氏に対する質問やコメント、講評がなされ、最後に主査から総括が行われた。

なお、審査委員会は金指久美子(本学教授)、匹田剛(本学教授・主査)、箕浦信勝(本学准教授)、森田耕司(本学准教授)に加え、学外より井上幸義先生(上智大学名誉教授)をお迎えして5名により構成された。

【論文の概要】

本論文は、ロシア語における名詞の文法性に関する研究である。伝統的にロシア語の性は男性・女性・中性の3つとされてきた一方で多くの研究者がロシア語の文法性はそのように単純な理解では問題が残ることを指摘している。本稿では、例えば指示対象の自然性に応じて男性名詞としても女性名詞としても振る舞える総性名詞や、女性の人間を指示する職業名などの男性名詞などに着目し、4回のアンケート調査の結果も含めながら記述的に整理し、とくに男性名詞と女性名詞の間には様々な形で中間段階となる名詞が存在し、連続体をなしていることを明らかにした。またその上でその複雑な振る舞いについて理論的説明も試みている。

本論文の構成は以下の通りである：

1. はじめに
2. ロシア語における一致と性
3. 無性別名詞と連続体

4. 混合名詞と総性名詞のふるまいの違いの要因

5. 有性別名詞と無性別名詞の連続体

6. まとめと今後の展望

補足資料：アンケート調査質問票

参考文献

第1章「はじめに」では、ロシア語における性による一致が必ずしも一様に決まらず、一致のコントローラとなる名詞によっては一致にバリエントが可能であり、当該領域には解決すべき問題が多く残されていることを示した。その上で本稿の議論の出発点となる Crockett(1976), Corbett(1991)などの先行研究や自身による光井(2014a)を概括し、それらの残した問題点を確認した上で、本論文の目的が(i)先行研究では扱っていない一致にバリエントを持つ不変化の男性名詞や、形態的・語彙的に男女のペアを持つ名詞なども含め記述的な全体像を描き出すこと、(ii)一致にバリエントを持つ男性名詞や総性名詞の複雑な振る舞いを理論的に説明することを試みる、の2点であることを示した。さらに本研究によって大きな意味を持つ、自身が過去4回にわたって行ったアンケート調査について紹介し、最後に本稿の構成を示している。

続く第2章では現代ロシア語における一致と性についてこれまでの先行研究を中心に概観した。先ず2.1.で一般に「一致」と呼ばれる現象には文における主語と述語の一致、名詞句における一致定語と主要部名詞の一致があることを確認したうえで、一致には形式的な要因で引き起こされる「統語的一致」のほかに意味的な要因から引き起こされる「意味的一致」があることを指摘した。さらに2.2.では、一般に男性・女性・中性の3項で対立すると理解されているロシア語の文法性であるが、実際には通常理解よりかなり複雑な様相を呈していることを示し、なかでも総性名詞と女性を指示する男性名詞について、先行研究を中心に概観した。

第3章では、前章で概観した先行研究における記述に残る不十分さを、過去行ったアンケート調査のデータなどを用いて補い、より包括的な記述を行うことを目指した。本章ではCrockett(1976)が「生物学的な自然性についての言及なしに人間や動物を示す名詞」としている無性別(asexual)名詞について検討し、男女の性に関する対立が離散的というより連続的な関係にあることを示している。先ず3.1.で文脈によって性の決まる無性別名詞について議論し、その中で総性名詞の一致に関わる振る舞いを精査することによって、総性名詞と呼ばれるものは一様なものではなく、「より男性名詞的なもの」から「より女性名詞的なもの」へと連なる連続体を形成していると指摘し、さらにそれは第2変化の男性名

詞とも連なる連続体であり，また第 1 変化や不変化の男性名詞へも連なるものであるとした．これに加えて 3.2.では文脈に影響を受けない無性別名詞についての振る舞いも精査し，結論として無性別名詞は，狭義の男性名詞と狭義の女性名詞が両端を占める以下の様な男性から女性へと連なる連続体を形成していると結論づけた(番号は本文中のもの)．

(3-156) 連続体としての無性別名詞

無性別名詞						
男性名詞 ребенок など	混合名詞			境界 глава староста	いわゆる総性名詞 (заводила など) ⇔ 女性名詞的 (лакомка など)	女性名詞 персона など
	第1変化の男性名詞 (хирург など) ⇔ 女性名詞的 (бухгалтер など)	不変化の 男性名詞 атташе など конференсье	第2変化の 男性名詞 судья など			
男性名詞的						女性名詞的

第 4 章では，第 3 章で記述を行った混合名詞と総性名詞の振る舞いについて Pesetsky (2013)が提案した女性化形態素 Ж を利用することによって，一致に関わる複雑な現象を理論的に説明することを試みた．議論にあたって，屈折タイプを含め以下の一致素性を用いることとした(番号は本文中のもの)．

(4-21)一致に影響を与える素性とその表示

性：男性 [+m, -f]，女性 [-m, +f]，総性 [+m, +f]

数：単数 [+sg, -pl]，複数 [-sg, +pl]，少数 [+sg, +pl]

格：主格 [NOM]，主格以外 [OBL]，数量生格 [OBL(GEN(Q))]

屈折タイプ：第 1 変化 [I]，第 2 変化 [II]，不変化 [INDC]

まず，混合名詞については可能な意味的一致のパターンが奇妙な非対称性を見せるが，それを説明するために Pesetsky (2013)は Ж を樹形図上で融合させる位置の違いによって可能な一致パターンのあり方を説明した．ところが，два「2」，оба「両方」といった数量詞が名詞句内にあると Pesetsky (2013)の説明だけでは一致に関する振る舞いが正しく予測できない．本稿はこの点に着目し，以下の条件に従って Ж が非活性化されるとした(番号は本文中のもの)．

(4-35)Ж が非活性化される条件

性 [+m, -f]，屈折タイプ [I]，数 [+sg]，格 [OBL]

これによって Pesetsky (2013)が説明できなかった現象まで説明が可能になったことになる．しかし，これだけでは同様の数量詞がある場合，句全体に与えられる格によって意味的一致の可否に違いが出ることが説明できない．そこで，以下のように格によって数素性が書き換えられるとする規則を提案し，さらに広い

事実が矛盾なく説明できる様になった(番号は本文中のもの).

(4-62)数量生格(GEN(Q))が語彙格に変わると, [+sg]の素性が[-sg]に書き換わる

続いて総性名詞についても説明するべく検討が行われ, その結果総性名詞は従来一般に述べられているように「意味的にのみ」一致を行っているわけではなく「統語的」とすべき一致も行っていることを指摘した. その点を正しく説明できる様に以下の様に女性形が現れる条件を設定した(番号は本文中のもの).

(4-77)統語的一致において女性形が現れる素性条件

[+f ∧ II]

また, 混合名詞の考察において採用したゼロ形態素 *Ж* だけでは総性名詞に関する振る舞いは説明しきれないことを指摘し, そこから新たに随意的ゼロ形態素 *M* を提案した.

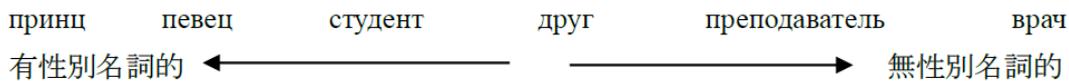
第 5 章では人を表す有生名詞のうち, これ以前では扱っていなかった男性名詞・女性名詞のペアをなすものについてその振る舞いを記述的に精査し, 議論を展開した. まず 5.1.で先行研究を概観した後, 5.2.でその一つである Bobaljik and Zocca (2011)について記述的に再検討を行い, その結果有性別名詞と無性別名詞の間には「中間段階」が存在すると考えられることを指摘する. 続いて 5.3.では男女ペアのある名詞のうち男性名詞の振る舞いに着目し, そのうちいくつかの語の振る舞いについて詳述した. その振る舞いを図示したのが以下のものである(番号は本文中のもの).

(5-58) ペアのある男性名詞のふるまい

	принц	певец	студент	друг	преподаватель	врач
複数形	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>				
Она+男性名詞	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>				
動詞述語	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
定語	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

これによりこれら男女ペアのある男性名詞が以下の様に有性別名詞から無性別名詞への連続体をなしていることを明らかにしている.

(5-59) 有性別名詞から無性別名詞までの連続体



さらに混合名詞も同様に連続体を成していることを示した上で最終的に以下の様な有性別名詞的なものから無性別名詞的なものへと連続体をなしていると結論づけている(番号は本文のもの).

(5-74) 有性別名詞と無性別名詞、男女ペアのある名詞と混合名詞の連続体

有性別名詞的 ←—————					————— → 無性別名詞的		
男女ペアのある名詞の男性名詞					混合名詞		
принц	певец	студент	друг	преподаватель	хируг	врач	бухгалтер
男性名詞的 ←—————					————— → 女性名詞的		

最終の第6章では、6.1.でここまでの議論をまとめた上で、6.2.では「今後の展望」として残された問題と今後の研究の方向性を示している。

【審査の概要と評価】

本論文は従来より先行研究で指摘はされてきた、ロシア語の名詞の性が決して男性・女性・中性の3つに明確に分かれるわけではないということを網羅的に記述して実態を明らかにしようと試みたものである。

本論文に対して審査委員からは高く評価できる点として以下の各点が指摘された：

- (1)これまで散発的にしか指摘されていなかったロシア語の文法性の「曖昧さ」を網羅的に記述し、かつロシア語の文法性の対立が、離散的というよりも連続的な性質を持っていることを明らかにした。
- (2)当該問題に関する我が国での先駆的な研究である。
- (3)提示された連続体の一部は意味的に見ても説得力のあるものであった。
- (4)本研究で研究対象とされた現象は、従来の参照文法・教育文法などでは記述仕切れていないものであり、その意味で今後教育・学習への応用が大いに期待できる。
- (5)狭義の文法論の枠内にとどまり当該の問題に取り組んだことで得られた成果として高く評価できる。

その一方で次のように問題点の指摘や今後の研究への提言が行われた：

- (1)理論面の今後の整理・改善が求められる。
- (2)先行研究に様々な時代・性質のものが見られ、情報の読み取り方に注意が必要である。
- (3)アンケート調査の内容・方法・規模などに改善の余地がある。
- (4)社会言語学的な問題や文体的あるいは意味的な特徴にも広く目を向けるべきである。
- (5)誤植が散見され、また表現面でもさらなる工夫が必要な箇所もある。

審査委員から指摘された以上の各点は、基本的に今後に残された課題を中心としており、いずれも本研究の価値を高く評価した上での建設的な提言あるいは要望である。このことは本研究が目指している方向に間違いがないことを示すものとも言えよう。

また、質疑におけるこれらの指摘や質問に対する光井氏の応答は適確かつ誠実なものであり、誰よりも光井氏自身が課題の所在をはっきりと自覚していることが見て取れた。さらに、それらの課題解決を含めた今後の研究の展開の可能性や方向性についても具体的に明確なビジョンを持ち、今後も研究を発展させて行く強い意思も感じられた。

以上本審査委員会は、論文の内容及び最終試験での質疑応答に基づき総合的に検討した結果、光井明日香氏の学位請求論文「現代ロシア語における性に関する一致をめぐって」が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。